

The Old Curiosity Shop における クウィルプのサディスティックな側面

吉 田 一 穂

1. クウィルプとネルのコントラスト

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) は、*The Old Curiosity Shop* (1841) においてかつて *Oliver Twist* (1838) において用いた手法を再び用いている。すなわち、善と悪のコントラストを作品の最後まで示すことにより、さらに善を印象づける手法である。善が善だけで存在するだけでなく、悪という対立概念を作品において共存させることにより、さらに善が印象的になるのだ。

ただ、両作品の相違点は、*Oliver Twist* において悪党であるフェイギン (Fagin) とサイクス (Sikes) が排除され悪党の手先となっていたオリヴァーがブラウンロウ (Brownlow) 氏の養子となって最後に救われる一方、*The Old Curiosity Shop* では悪党であるクウィルプ (Quilp) が排除されるにもかかわらず、ネル (Nell) が最後に死を迎えることである。すなわち、ディケンズは、*Oliver Twist* における犠牲者としての子供像を *The Old Curiosity Shop* において別の形で表現したと言えよう。具体的に言うと、ディケンズは *Oliver Twist* においてオリヴァーの運命を救貧院、煙突掃除人、葬儀屋、犯罪者層と関連づけることにより、時代において犠牲者となった子供たちへの自身の気持ちを「天に召される子供のイメージ」で統一的に表現したが、*The Old Curiosity Shop* においても「天に召される子供のイメージ」を用いたと言える。

The Old Curiosity Shop の最後のネルの死は、ヴィクトリア朝時代において

犠牲者となった子供たちを想像させる死であるが、時代において死んでいった子供たちへの共感からか、ディケンズはネルの死を次のように安らかなものとして描いている。

She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon. She seemed a creature fresh from the hand of God, and waiting for the breath of life; not one who had lived and suffered death. (538-39)

彼女は死んでいた。こうまで美しく静か、こうまで苦しみの跡のない、こうまで目に美しい眠りはなかった。彼女は、神さまのみ手から生まれ、命の息吹を与えられるのを待っているよう、命を終り死を味わったものとは思えなかった。

一方で、このようなネルの死に関して忘れてはならないことは、作者ディケンズの個人的記憶である。1837年5月6日、ディケンズは、キャサリン(Catherine)とメアリーとともにセントジェイムズ劇場(St James Theatre)で笑劇 *Is She His Wife?* を楽しみ、夜中1時頃帰宅した(Ackroyd 238)。メアリーは「申し分ない健康状態で、いつもながらにこやかに」床につく支度をしに自室に引き上げたが、そのとき、彼女の金切り声にチャールズとキャサリンは、あわてて彼女の部屋に飛んでいった。メアリーは心臓発作に倒れ、翌日午後3時17歳の若さで息を引きとった。彼女は6日後埋葬されたが、ディケンズは深い悲しみに襲われていた。メアリーの死に対するディケンズの喪失感と悲しみは、彼がかつて経験したことのないものであった(Ackroyd 238)。

ディケンズは、ジョン・フォースター(John Forster)の勧めもあって *The Old Curiosity Shop* の主人公ネルに悲劇的な結末を与えることになったが、最後の場面を描かなければならなくなったとき、フォースターあての手紙に、

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面

「彼女（ネル）が亡くなれば、自分ほど寂しく思う者はないであろう。」、「どんなふうにならざるかを考えるだけで、あの古い傷がまた血を吹き出しそうになります。」、「この悲しい物語を考えると、可愛いメアリーの死が昨日のここのように思えます。」と書いている（*The Letters* Vo. II., 181-82.）。このことから、ディケンズがメアリーを追想してネルを描き出したことは明らかである。ディケンズにとってメアリーは、全ての若さ、無垢、純粋さ、美を代弁していると言ってもよく（ウェップ 74）、メアリーがモデルであるとしばしば指摘される *Oliver Twist* のローズ・メイリー（Rose Maylie）を描いた後、ディケンズは、*The Old Curiosity Shop* のネルの死によって自身の痛ましい記憶を思い出すとともに、個人的な理想的女性像を永遠のものにしたと考えられる。¹

しかし、*The Old Curiosity Shop* においてネルの無垢、純粋さ、美はそれのみでは強い印象を与えない。彼女を脅かすグロテスクな存在クウィルプ（Quilp）とのコントラストにより、さらに彼女の無垢、純粋さ、美は強い印象を我々に与えるのだ。

エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）は、荒い息をはく犬のような口を持つクウィルプの特徴を、「陽気なたわむれ、臆病、卑劣で甘やかされてだめになった子供の持つ悪意」でとらえる（Poe 21-22）。またフランク・ドノヴァン（Frank Donovan）は、クウィルプをディケンズの下劣な悪玉の一人としてとらえ（Donovan 89）、シルベル・モノ（Sylvère Monod）は、クウィルプを悪の天才ととらえる（Monod 171）。

クウィルプの職業は、多種多様であり、仕事は数多いものであったが、特定の職を持つものではない。彼はテムズ（Thames）川の川べりのきかない通りや路地の地区から家賃を集め、水夫や下級船員に金を前貸しし、東インド会社のいろいろな航海士の投機的事業に関与する男である。また、税関の鼻先で密輸入の葉巻きをふかし、光沢のある帽子をかぶり、丸々としたジャケットを着た人たちと毎日契約を結ぶ男である。このような彼は、貧しさと苦しみに満ちたロンドンの生活に耐え切れなくなり、トレント老人に、「乞

食になり、幸せにならましよう」と言うネルとは相入れない性質を持つ人物なのである。ジョセフ・ゴールド（Joseph Gold）が指摘しているように、ネルとクウィルプは、「純潔さ」と「腐敗させるもの」という人間の対照的な性質でとらえることができよう（Gold 95）。そして、ネルの女性らしさを強調するものが、クウィルプのサディスティックな側面である。本論文では、クウィルプのサディスティックな側面をいかにディケンズが強調しているかについて述べたい。

2. *Punch and Judy*

まず、クウィルプという登場人物の源泉についてであるが、ポール・シュリッケ（Paul Schlicke）が指摘しているように、*Punch and Judy* のパンチ（Punch）が最も明白であると考えられる（Schlicke 424）。ここで *Punch and Judy* について簡単に説明しておきたい。

Punch and Judy は人形劇であり、たいていの場合野外で演じられる。この人形劇は、かつてイギリスの町の通りでよく見られたが、現在では海辺のリゾート地で行われることが多い。劇は、操り人形師によるものであり、戦いと殴打に満ちている。パンチはせむしでわし鼻（かぎ鼻）の無慈悲な人物であり、妻に対しても無慈悲であり、窓から投げ出された子供のような犠牲者だけでなく、妻をも殺してしまう。²

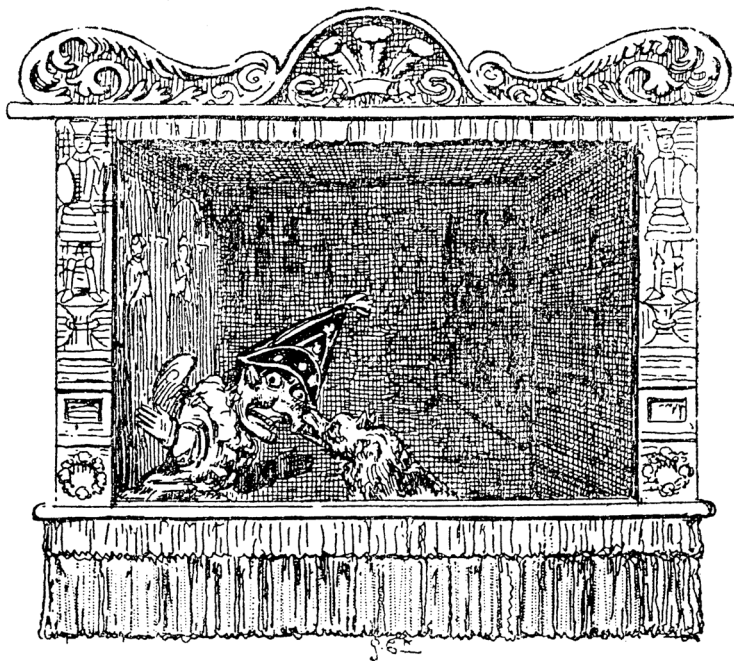
パンチは、最初イタリアで考案された。パンチの最初の名前は、パルチネラ（Pulcinella）であったと考えられている。イタリアのパンチすなわちパルチネラを考案した人は、シルヴィオ・フィオリロ（Silvio Fiorillo）という人であった。約400年前のことであるが、当時、大衆的な喜劇作家や喜劇俳優が娯楽的で興味深い人物の上演をしながら国じゅうを旅して回ることがよく行われていた。そこでシルヴィオ・フィオリロがおそらくナポリの旅芸人の新しい出し物としてパンチの物語を考案したと考えられている。パンチは、300年程前、イングランドにもたらされた。アン女王（1665-1714）の頃と考えられている。パンチのショーの最初の興行者は、パウエル（Powell）

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面

氏であった。彼は、セント・ポール教会の反対側のコヴェント・ガーデン (Covent Garden) でショーを始めた。³

The Old Curiosity Shop において、ディケンズは *Punch and Judy* をネルと老人が旅の途中で出会う旅の見世物師トマス・コドリン (Thomas Codlin) とショート (Short) の持つ人形により説明的に描き出している。第16章においてネルと老人は、教会の後ろを通るが、草の上に坐っている二人を見る。ディケンズはネルと老人の目に映ったコドリンとショートを「この男たちが旅の見世物師—パンチの気まぐれの演出者だと見当をつけるのは、べつに難しいことではなかった」(122) と書いているが、その理由として人形の鼻とあごがかぎ型であることと、人形がかぶっている帽子がとんがり帽であるという外見を理由として挙げている。また、第18章においてディケンズは *Punch and Judy* に出てくる犬トウビー (Toby) を踊る犬と興行師ジェリー (Jerry) とショートとの会話に出てくるジェリーのポケットの中のテリア犬と関連づけて説明している。ディケンズはここで *Punch and Judy* に出てくる犬がトウビーという名前であり、パンチの鼻にかぶりつく場面があることを説明している。⁴ (図1) さらに、第27章においてディケンズはろう人形の興行主ジャーリー (Jarley) 夫人とネルの会話を通して *Punch and Judy* の特徴を批判的に述べている。「きたならしいパンチの仲間入りなんて絶対しちゃいけないことよ」(203) というジャーリー夫人は、ろう人形について尋ねるネルにろう人形について「低級な打つなぐるのさわぎ、あのひどいパンチのように冗談をとばしたりキーキーいったりするもんじゃなく、冷淡と上品さのいつも変わらぬ態度をした、いつも同じものよ」(203) と説明する。このジャーリー夫人の説明は、パンチの攻撃性をよく表現している。

The Old Curiosity Shop における *Punch and Judy* を考えるとき注目に値することは、ディケンズが作品において *Punch and Judy* の特徴を説明するだけでなく、登場人物クウィルプのサディスティックな側面をパンチから生み出していることだ。クックシャット (A. O. J. Cockshut), フィールドینگ (K. J. Fielding), フィリップ・コリンズ (Philip Collins) が指摘しているよ

図1 *Punch and Judy*

うに (Cockshut 93; Fielding 36; Collins 273), クウィルプには明らかにサディスティックな側面が見られるが、パンチの特徴を強く感じさせることからパンチのサディスティックな側面からクウィルプのサディスティックな側面が生み出されていると考えられる。

スティーブン・マーカス (Steven Marcus) は、クウィルプのバイタリティーが単に暴力的で攻撃的であるのみならず、それは病的であり、サディスティックであると述べているが (Marcus 158), クウィルプのこうした性質は、第6章におけるキットとトム・スコット (Tom Scott) の格闘の場面に明確に見てとれる。

With which defiances the dwarf flourished his cudgel, and dancing round

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面

the combatants and treading upon them and skipping over them, in a kind of frenzy, laid about him, now on one and now on the other, in a most desperate manner, always aiming at their heads and dealing such blows as none but the veriest little savage would have inflicted. This being warmer work than they had calculated upon, speedily cooled the courage of the belligerents, who scrambled to their feet and called for quarter.

‘I’ll beat you to a pulp, you dogs,’ said Quilp, vainly endeavoring to get near either of them for a parting blow. ‘I’ll bruise you till you’re copper-coloured, I’ll break your faces till you haven’t a profile between you, I will.’
(46)

こう挑戦の言葉を投げて、小人は棍棒をふりかざして狂気のようになって、ふたりの闘士のまわりを踊り、ふたりを踏みつけふたりの上でとびあがって、すごい勢いで前後左右にそれぞれを打ちすえ、いつも相手の顔にねらいをつけ、この小人の野蛮人ならではのすごい打撃の雨を降らせた。これは予想以上の熱戦になったので、戦闘者の熱はすぐにさめ、ふたりはやつとのことと立ち上がり、助命を願い出ることになった。

「めちゃくちゃにたたきつぶしてくれる、この犬どもめ」とクウィルプは叫び、最後の一撃を加えようとしたが、どちらに近づくこともできなかった。「肌が銅色になるまで打ちのめしてやるぞ。ふたりのあいだで顔の輪郭なんぞなくなっちまうまで顔を痛めつけてやるぞ、うん、やってやるとも。」

棍棒でキットとトム・スコットを打ちすえ、「めちゃくちゃにたたきつぶしてくれる。この犬どもめ」と叫ぶクウィルプは、棒で登場人物を打ちすえ、トビー、子供、妻のジュディー、医師、刑吏を次々と殺し、ついには悪魔にも見舞われるが、それもやっつけてしまうパンチの破壊力とサディスティックな側面を持つ人物と言える。

このようなパンチの特徴は、クウィルプと妻との関係にも見てとれる。第4章におけるクウィルプが妻に言う言葉「おお大事なかわいい女！ おおじつに甘美な美女よ！」(35)は、パンチが妻のジュディーが登場の際彼女に言う「何てかわいい女なんだ。彼女は本当に美女だね」(*Punch and Judy*, 6)とよく似ている。クウィルプは、自分の支配下にあり服従している妻を、金を貸している老人について探りを入れるため使う。それは、自身の疑問（老人の金の行き先）について知るためである。「あの娘のじいさんのこと、ふたりがなにをしているか、どんなふうに暮しているか、じいさんがあの娘にどんなことを話しているか、そうしたことについてあの娘からなにかひきだせるか、ひとつやってみるんだ。」(47-8)と命令するクウィルプに対し妻は、「わたしあの娘が大好きなのーもしもあの娘を私があざむかないですむことならー」(48)と言う。躊躇する妻を見、クウィルプは言うことをきかない妻に対して当然の罰を加える棒はないかと探しているようにあたりを見回すが、クウィルプの探す棒は、パンチが妻を打つ棒を彷彿させる。

このようなクウィルプのサディスティックな側面は、第50章で彼が長く留守にしていたのでテムズ川で溺死したと思い込んだ妻に対する言動に見られる。ディケンズは、クウィルプ夫妻の夫婦喧嘩が男女双方が論じ合う一般的なものでなく、例外的なもの、すなわち、そこでの言葉は夫の長口舌に限定され、クウィルプ夫人から出るのは、わずかの嘆願的なものだけ、長い間をおき、とても柔順なおとなしい調子で語るふるえ声の短い言葉にすぎなかった、と説明する。クウィルプが溺死したと思い込んだ夫人は涙に暮れておしだまったまま坐りこみ、関白亭主の叱責をおとなしく聞いている。徹底的に男性優位主義であるクウィルプの妻に対する次の言葉は、彼のサディスティックな側面をよく表している。

‘How could you go away so long, without saying a word to me or letting me hear of you or know anything about you?’ asked the poor little woman, sobbing. ‘How could you be so cruel, Quilp?’

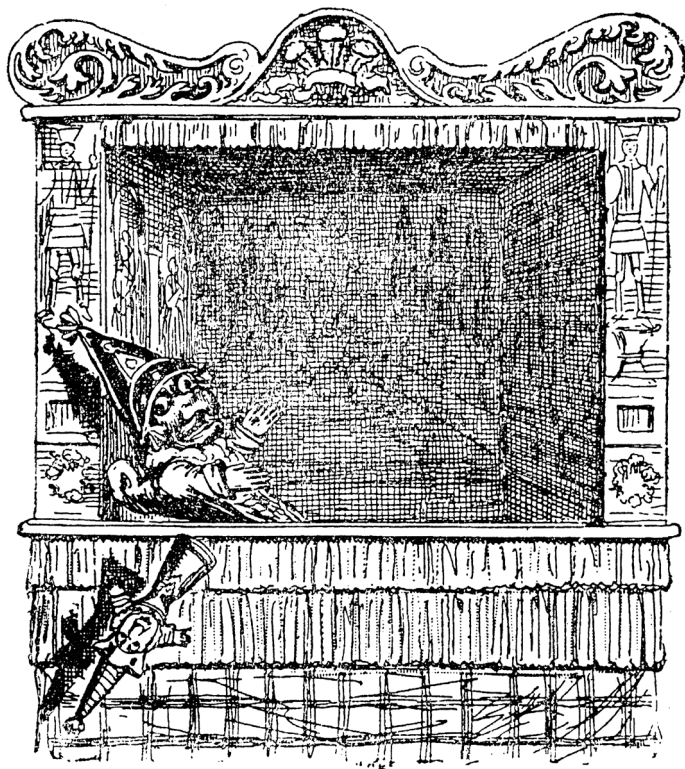


図2 *Punch and Judy*

‘How could I be so cruel? cruel!’ cried the dwarf. ‘Because I was in the humour. I’m in the humour now. I shall be cruel when I like. I’m going away again.’ (370-71)

「わたしに一言もいわず、なんの便りもせず、なんにも知らせないで、どうしてあんなにながく外出していられたの？」あわれな少女は、しくしく泣きながら、尋ねた。「どうしてそんなむごい仕打ちができるのかしら？」

「どうしてそんなむごい仕打ちができるかだって？ むごいだって！」

と小人は叫んだ。「そうした気分になってたからさ。いまだって、その気分になってるんだ。好きなときにはむごくなってやるぞ。また外に出かけるんだからな。」

「どうしてそんなむごい仕打ちができるのかしら」と尋ねる妻に対し、「そうした気分になっていたからさ」というクウィルプは、子供を窓から落とし、殺してしまった残酷な行い（図2）に対し、棒で自身を打った妻ジュディーを逆に殺してしまうパンチを彷彿させる。

この場面のクウィルプがパンチからきていると考えられる理由は、その前に示されるクウィルプの外見にもよる。広告に出す人相書きについて尋ねるサムソン・ブラス（Samson Brass）に対し、ジニウィン（Jiniwin）夫人は、クウィルプの鼻について、「ぺちゃんこよ」（368）と言うが、それに対し、クウィルプは「わし鼻だ!」と言う。このことから、ディケンズがパンチを基にクウィルプという人物を生み出し、サディスティックな側面を付与したと考えられる。パンチとジュディーの関係は、*The Old Curiosity Shop* においては、クウィルプと彼の妻の関係のみならずクウィルプとネルの関係にも見られる。ディケンズの意図するところは、男性優位主義者と服従する女性という構図である。第16章で「ジュディーの衣服がまたボロボロになっちまった。針と糸はもってないんだろうな?」（124）と言い、重要な演技者の痛ましい荒廃ぶりをながめながら、途方に暮れているコドリンにネルは、「籠の中に針と糸がありますよ。それをわたしがなおしてあげましょうか?」（124）と言って、ジュディーを修復する。ここで注目に値することは、ディケンズがジュディーとネルを重ね合わせるだけでなく、針仕事によってネルの女性らしさを強調していると考えられることだ。ただネルがジュディーと異なる点は、ジュディーが子供を殺したことでパンチを棒で打ち逆に殺される一方で、ネルがクウィルプの脅威から逃れることである。このことから、ディケンズが男性優位主義者と服従する女性のイメージを与えるためにのみパンチとジュディーを用いたと考えられ、全面的にネルをジュディーから作

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面

り出したわけでないことが明らかとなる。次にサディスティックなクウィルプを別の側面から考えてみたい。

3. リチャード3世

パンチ以外にもクウィルプのモデルと考えられる人物がいる。それは、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) のリチャード3世である。フィリップ・コリンズは、クウィルプを「狂気したような状態にある俗物根性のリチャード3世」ととらえているが (Collins 273), クウィルプとリチャード3世にはいくつかの共通点がある。まず両者の共通点は、両者の外見に見られる。リチャード3世は、作品の第1幕第1場で自身の姿について次のように語る。

I, that am curtail'd of this fain proportion,
(Cheated of feature by dissembling Nature,
Deform'd, unfinish'd, sent before my time
Into this breathing world scarce half made up—
And that so lamely and unfashionable
That dogs bark at me, as I halt by them—
.....

And therefore, since I cannot prove a lover
To entertain these fair well-spoken days,
I am determined to prove a villain,
And hate the idle pleasures of these days.

(I. I. 18-30)

このおれは、生まれながら五体の美しい均整を奪われ、
ペテン師の自然にだまされて寸詰まりのからだにされ、
醜くゆがみ、できそこないのまま、未熟児として、

生き生きと活動するこの世に送り出されたのだ。

このおれが、不恰好にびっこを引き引き

そばを通るのを見かければ、犬も吠えかかる。

.....

おれは色男となって、美辞麗句がもてはやされる

この世のなかを楽しく泳ぎまわることなどではせぬ、

となれば、心を決めたぞ、おれは悪党となって、

この世のなかのむなしい楽しみを憎んでやる。

生まれながらの五体の美しい均整を奪われ、寸詰まりの体となったリチャード3世の外見は、クウィルプの外見と重なる。なぜなら第3章において、ディケンズが描写するハンフリー（Humphrey）親方の目に映ったクウィルプの姿は、背がひどく低く、まったく小人（dwarf）と言えるほどのもので、頭と顔は巨人にもふさわしいほど大きく、グロテスクな表情である彼の笑いは、口にまだわずかに残っている牙のような歯をあらわし、彼にあえいでいる犬の様相を与えているからだ。このようなグロテスクなクウィルプの特徴は、彼の食事の際にもよく描写されている。第5章で朝食を食べるクウィルプは、ゆで卵を殻ごとすっかり食べ、大きな車えびを頭も尻尾もくつついたままガツガツと食べるが、その様子は、彼の凶暴な性質を表しているかのようである。また、「そばを通るのを見かければ、犬も吠えかかる」というリチャード3世の言葉は、第21章で犬に吠え立てられるクウィルプを連想させる。（図3）しかしこの場面は、先に述べたパンチが犬のトウビーによってかぶりつかれる場面をも連想させ、ディケンズがパンチとリチャード3世双方からこの場面を作り出したと考えられる。

クウィルプとリチャード3世の類似点は、これだけにとどまらない。両者の類似点は、両者と女性との関係にも見られる。第4章において、クウィルプ夫人は、近所の6人ほどの夫人たちと茶会を開いている。もちろん、彼女の母親もその中にいあわせる。茶会の話題は、弱い女性に対して横暴にふる

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面図3 *The Old Curiosity Shop* [Quilp defies the Dog]

まおうとする男性の傾向、その横暴に抵抗し、自分たちの権利と尊厳を主張しなければならない女性の義務に向かっている。太った夫人が話の皮切りに、クウィルプ夫人はどんな具合かと聞く。ジニウィン (Jiniwin) 夫人は、「荒い雑草は、確かにはびこるわ」(30) と言うが、夫人たちはそれに調子を合わせてため息をつき、深刻に頭をふり、殉教者を見るようにクウィルプ夫人を見る。このジニウィン夫人の言葉は、クウィルプの性的支配力を言った言葉であり、彼の身長がいっこうに伸びないのと対照的である。⁵「もしわたしが明日死ぬようなことがあったら、クウィルプは自分の好きなどんな人でも結婚できるのよ」(32) と言うクウィルプ夫人の言葉に対し、憤慨の悲鳴が発せられる。一人の夫人は、彼が自分に対し結婚をほのめかしたら、刺殺してやると言う。それに対し、クウィルプ夫人はさらに「クウィルプはその気になれば、ちゃんとやり方を心得ていて、ここにいるどんな美しい人だって、わたしが死に、その人が自由の身、そして彼が言い寄ろうという気にな

ったら、とても彼を断わるわけにはいなくなるのよ」(32)と彼の性的支配力について説明する。このようなクウィルプ夫人の説明は、とてもよくクウィルプの性質を言い表している。

クウィルプ夫人の説明が正しいことは、第6章でクウィルプがネルに言い寄る場面で明らかとなる。なぜならクウィルプは自分の妻が死んだとき、第2のクウィルプ夫人にならないかとネルにもちかけるからである。さらに第9章におけるネルを表現するクウィルプの言葉が彼がまさにネルを性的に支配せんとしているかのように思われる。「まったくみずみずしく若い盛りの、つつまじやかな、かわいいつぼみ」、「まったくぼっちゃりした、ばらのような、感じのいい、かわいらしいネル」、「とても小柄で、からだがピッチリとしまり、じつに美しい姿をし、とてもきれい、血管はすごく青く、肌はぬけるよう、とても小さな足をし、じつに魅力的な物腰だ」(73)などである。このようなクウィルプの言葉は、単にクウィルプがネルに性的魅力を感じていることを示すのみでない。ディケンズがネルと運命を共にする老人を「無理をして微笑を浮かべてそれに答え、ひどく苦しいジリジリした気分と戦っているのが、はっきりと読みとられた」(73)と描写することにより、クウィルプの言葉はサディスティックなものとなるのだ。また「彼は老人に、いや、ほかのだれにでも、できるときにはいつでも拷問の苦しみを味せるのを楽しみにしている男だった」(73)という箇所は、クウィルプのサディスティックな側面をよく表している。クウィルプは、自身の貸した金を老人が賭博に使っていたことで彼を責め追い詰める。「このきちがいじみたことをいつはじめたんだ」(74)というクウィルプの言葉は、財産を呼び込むため賭博に走った老人の行動が誤った行動であったとしても、老人に十分に苦痛を与える言葉である。このようなクウィルプの脅威から逃れ、ロンドンの家を脱出する前に、老人は、「明日の朝、いいかい、この悲しみの場所から面をそむけ、鳥のように自由に幸福になれるんだよ」(94)と言うが、家を立ち去る前ネルは、自分たちが飼っていた鳥を失うことを悲しむ。ここで注目すべきことは、ネルと鳥がイメージの上で重なることである。すなわち、籠の

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面

中の鳥とクウィルプの脅威にとり囲まれていたネルがイメージの上で重なり、監禁状態から自由になるという印象を我々に与えるのだ。ネルがキットの手に入ることを期待して置いていった鳥を見、クウィルプは、「そいつの首をねじってしまえ」(105) と言うが、彼の言葉は、鳥によって象徴されるネルにも及ぶと考えられ、彼のサディスティックな側面を強調している。

クウィルプのネルに対する性的侵略と性的支配は、*King Richard III* におけるリチャード3世のアン [Anne: ヘンリー6世 (King Henry VI) の息子であるエドワード (Edward) の未亡人] に対する性的侵略と性的支配を思い起こさせる。第1幕第2場において、ヘンリー6世を殺した張本人としてリチャード3世を攻撃するアンに対しリチャード3世は、ヘンリー6世が「天に召されるのにふさわしい人であった」(I. II. 107) と言い、「地上よりもっとふさわしい場所に送り届けてやったのだから自分は感謝されてもいい」(I. II. 109-10) と言う。アンは、天国に行ったヘンリー6世と比較するかのようになり、リチャード3世に「お前にふさわしい場所は地獄以外にあるまい」(I. II. 111) と言うが、リチャード3世は、自分にふさわしい場所が一つだけあり、その場所はアンの寝室であると言う。さらに政略結婚の意図を持つリチャード3世はアンに「あなたの復讐にはやるお心が救せぬというのであれば、さあ、この研ぎすまされた鋭い剣をお貸ししよう。もしそれを、この真心のこもる胸深く突き刺し、あなたは憧れる魂を迷い出させたいと言われるなら、このように私は胸をあらわにし、ひざまずき、あなたの手によって死を賜われるようお願いする。」(I. II. 177-82) と詰めよる。さらにリチャード3世は、ヘンリー王も王子エドワードも自身が殺したと白状し、「だが私をその気にさせたのは、その天使のような顔だ。その剣をとられるか、それとも私をとられるか。」(I. II. 187-88) とアンに決断を迫る。その結果アンは、彼の性的支配力の前に無力となったかのように彼のものになってしまう。

性的支配ということを考えると、*The Old Curiosity Shop* においてクウィルプがネルに言い寄る場面がリチャード3世がアンに迫る場面と類似していると言える。クウィルプは、ネルの性的魅力を賞賛しながら、「第一のクウィ

ルプ夫人が死んだとき、第二のクウィルプ夫人になるこったよ、ネル」(45) と言うが、自分の妻が亡くなることをものともせずニネルに言い寄るクウィルプには、ヘンリー王も王子エドワードも殺しておきながらアンを得ようとするリチャード3世の自己中心的な側面が見られる。さらに、性的侵略者としてのクウィルプとリチャード3世には類似点がある。ジェフリー・サーリー (Geoffrey Thurley) は、クウィルプが性的侵略者であることを指摘する一方で、骨董屋を子宮にたとえ、そこへクウィルプが入り込む、と象徴的にとらえる (Thurley 52)。クウィルプは第11章において弁護士ブラスを連れてきて、法律の力により老人とネルの家を占領するが、二階からおりてきたネルを見、「なんてきれいなかわいいうネルだろう!」、「クウィルプの膝に坐りにやってきたのかい? それともこの奥の小部屋で寝るつもりなのかね?」(86) と言う。このクウィルプの言葉は、明らかに彼の性的侵略を表す言葉であり、先に述べたリチャード3世が自身にふさわしい場所がアンの寝室であると言う箇所を思い起こさせる。

このように見ると、クウィルプとリチャード3世は、サディスティックな観点からだけでなく、性的支配・性的侵略という観点からも類似点を持つ人物と言えるが、異なるのは、両者に対する二人の女性の反応である。アンがリチャードの性的支配に屈服してしまう一方で、ネルがクウィルプの影響から逃れる点で両者は異なると言えるのだ。*The Old Curiosity Shop* はネルのクウィルプからの逃避の物語とも言え、ネルの逃避が作品においても重要な意味を持っている。その重要な意味とは、もしネルがクウィルプから逃れなければ、彼女もまたクウィルプの妻のように、男性の支配力に服従する以外になく、彼から逃れることにより、男性の支配力から解放された存在となることだ。

4. ネルの逃避

ここで、クウィルプの脅威から逃れた後のネルに目を向けてみたい。第27章においてネルは、ジャーリー夫人の仕事の手伝い(客への人形の案内)を

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面図4 *The Old Curiosity Shop* [Nell hides from Quilp]

することになり、馬車で移動中ある町に泊まることになる。ネルは、ジャーリー夫人専用の旅行用馬車の中で眠ることになるが、夜の快い冷気にさそわれて外に出ていたくなる。好奇心と恐怖の入りまじった気持ちでネルは、古い町の門に近づき上の方を見上げるが、そのとき一人の男が現れる。その男とは醜悪でグロテスクなクウィルプなのだが、ネルは暗い隅に身をひそめ、彼が自分の近くを通り過ぎていくのを見る。クウィルプは手に棒を持ち、門の道の影からすっかり出たとき、門によりかかり、ふりむき、手招きをする。(図4) ネルは、クウィルプの手招きが自分ではなくトランクを運ぶ少年へのものだと知るが、ひどい恐怖につつまれる。注目に値することは、クウィルプの持つ棒により、彼がパンチを髭髯させサディスティックな印象を与えることだ。さらに重い荷物を背負っている少年に向かって言うクウィルプの言葉「もっと早く！」(207)、「お前ははっているんだぞ、この犬め、ノソノソはって、虫けらのように旅をしているんだ。いま鐘が鳴り、もう12時なんだぞ。」(208) は、彼のサディスティックな側面を表していて、ネルはそ

れが自分に対する言葉でなくともひどい恐怖心にとらわれ、自分が群がる多くのクウィルプにすっかりとりかこまれ、空気そのもののさえ、そうした姿でいっぱいになっているように感じる。このことからクウィルプは、ネルがロンドンの家を離れてからも彼女の心に影響を及ぼし、恐怖を与え続ける存在であると言えるが、ディケンズはクウィルプとは相入れない性質を持つ女性ネルを作品の最後で天国に送ることにより、クウィルプの影響力から完全に解放されたネルを我々に印象づけている。

5. 結 論

以上、クウィルプのサディスティックな側面を考察してきたが、ディケンズは、パンチとリチャード3世のサディスティックな側面を巧みに利用し、クウィルプのサディスティックな側面を創り出していると言える。そしてクウィルプのサディスティックな側面は、コントラストによりネルの女性らしさを強調している。最後にクウィルプとネルの死について付け加えておきたいが、ディケンズは両者の死を対照的なものとして描いている。ジョン・R・リード (John R. Reed) は、「悪の権化であるクウィルプは、舞台からすっかり取り除かれなければならない。悪は、善の原理が支配しているフィクションの世界にいつけることはできない。」と述べているが (Reed 113)、クウィルプは、*King Richard III* におけるリチャード3世の死を連想させる死をとげる。第67章でクウィルプ夫人は、サリー・ブラース (Sally Brass) からの手紙をクウィルプに渡す。その手紙には彼の手下ともいふべきサムソン・ブラースがキットをおとし入れる自分たちの計画を暴露してしまったと書いてある。クウィルプは、何度もその手紙を読み返し、サムソン・ブラースへの怒りから、彼を水攻めにして殺してやりたいと言う。このような彼は、皮肉にも自身その言葉通りの死をとげる。彼は水の中で、大きな叫び声をあげるが、水の流れは彼の思惑をこえ、ものすごい力で彼を運んでいく。彼の叫び声は、*King Richard III* においてリチャードが敗北を真近にして発する叫び声、「馬のかわりにわが王国をくれてやる」(V.IV.7) を思い起こさせ

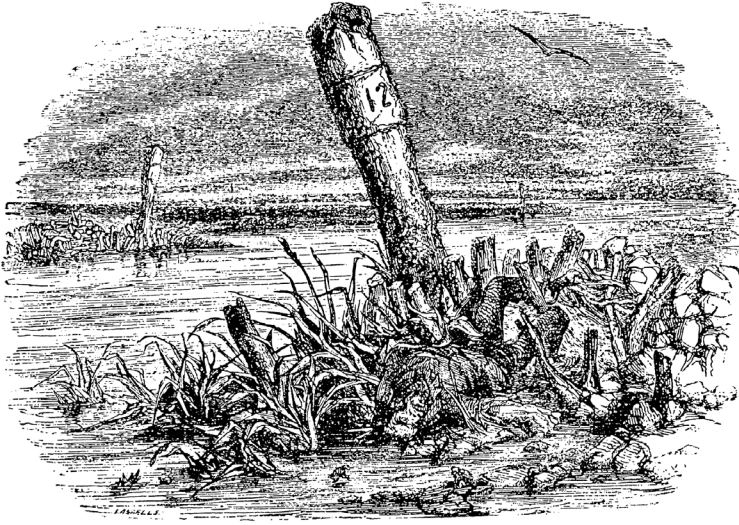
The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面

図 5

る。リチャード3世は、劣等感ゆえに善なる本性を歪め、徹底して悪を行い王冠をねらったが、結局最後には自身の本性と卑小さに気付く。クウィルプの場合、劣等感はあまり感じられないが、彼の悪の力も自然の力にはかなわず、やはり人間の卑小さを印象づける。陰気な場所に放り出されたクウィルプの死（図5）と対照的なのが、ネルの死（図6）である。ネルの死は、生前の心配、苦しみ、疲労を跡形も残さない、安らぎと幸福な新生を感じさせる死である。ディケンズは、キットの持ってきた古い鳥籠の中の小鳥によりネルを象徴的に描写している。ディケンズは、籠の中で機敏に動き回っている小鳥により、ネルが地上の苦しみから解放されたことを印象づけている。さらに注意すべきことは、その小鳥をディケンズが「指でも殺すことができるあわれな、ほっそりした小鳥」（539）と表現していることだ。このことは、第13章においてネルがキットの手に入ることを期待して置いていった鳥を見、クウィルプが言った「そいつの首をねじってしまえ」（105）を思い起こさせる。このことから、ディケンズがネルを小鳥により象徴的に描写することに



図 6

より、サディスティックなクウィルプから完全に解放されたネルを読者に印象づけている、と考えていいだろう。

注

1. アンドリュー・サンダース (Andrew Sanders) は、「ディケンズの個人的な女性らしい性質の理想が、文学において存在していたステレオタイプから発展し、ローズ・メイリーからアグネス・ウィックフィールド (Agnes Wickfield) やエステル・サマーソン (Esther Summerson) に至る家庭を大切にし、より崇高なものへと導く家庭の天使となったように思われる」と述べている。[Sanders 345.]
2. 1962年、*Punch and Judy* の300年記念祭がロンドンのコヴェント・ガーデンのセント・ポールで行われた。[*The Cambridge Illustrated Dictionary of British Heritage* 346.]

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面

3. セント・ポール教会の管理人は、パンチの上演がコヴェント・ガーデンのセント・ポール教会の集会の人数を少なくしているだけでなく、パウエル氏が礼拝の時間の間ショーを行うとき、教会の鐘がそれを聞いていた全ての人に上演の始まりの知らせであると勘違いされた、と不満を述べた。[Introduction to *Punch and Judy* i-iii.]
4. 第21章でクウィルプは、ディック・スウィヴェラー (Dick Swiveller) とネルを結婚させる計画を考え有頂天になるが、そのとき、大きな猛犬がとび出す。おそろしい面相をして犬をののしり、悪魔踊りで犬を狂乱状態に陥れるクウィルプはパンチを連想させる。
5. ジニウインの言葉は、*King Richard III* におけるヨーク (York) と侯爵夫人の会話を思い起こさせる。

York. 'Small herbs have grace; great weeds do grow apace.'

And since, methinks I would not grow so fast,

Because sweet flowers are slow and weeds make haste.

Duch. Good faith, good faith, the saying did not hold

In him that did object the same to thee!

He was the wretched'st thing when he was young,

So long a-growing, and so leisurely,

That if his rule were true, he should be gracious.

(II. IV. 13-20)

Works Cited

Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.

Cockshut, A. O. J. *The Imagination of Charles Dickens*. London: Collins Clear-Type Press, 1961.

Collins, Philip. *Dickens and Crime*. London: The Macmillan Press Ltd., 1994.

Donovan, Frank. *Dickens and Youth*. New York: Dodd, Mead & Company, 1968.

Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. New York: Oxford UP, 1991.

Everett, Michael D. (Ed.) *Punch and Judy*. Sheffield: MDE Publications, 1993.

Fielding, K. J. *Studying Charles Dickens*. Harlow: Longman, 1986.

Gold, Joseph. *Charles Dickens: Radical Moralists*. Minneapolis: The Copp Clark Publishing Company, 1972.

- Isaacs, Alan. Monk, Jennifer. (Ed.) *The Cambridge Illustrated Dictionary of British Heritage*. Cambridge UP. 1986.
- House, Madeline. Storey, Graham (Ed.). *The Letters of Charles Dickens vol.II*. Oxford: Clarendon Press, 1989.
- Marcus, Steven. *Dickens: From Pickwick to Dombey*. London: Chatto & Windus, 1965.
- Monod, Sylvère. *Dickens the Novelist*. Norman: University of Oklahoma Press, 1968.
- Poe, Edgar Allan. "The Old Curiosity Shop", in *Dickens Critics*. Ed. George H. Ford, Lauriat Lane, Jr. New York: Cornell UP, 1961.
- Reed, John R. *Dickens and Thackeray*. Athens: Ohio UP, 1995.
- Sanders, Andrews. "High Victorian Literature", in *The Oxford Illustrated History of English Literature*. Ed. Pat Rogers. Oxford: Oxford UP, 1987.
- Schlicke, Paul. "The Old Curiosity Shop", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP. 1999.
- Shakespeare, William. *The Arden Shakespeare: King Richard III*. Ed. Antony Hammond. London: Methuen & Co. Ltd., 1981.
- Thurley, Geoffrey. *The Dickens Myth: Its Genesis and Structure*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1976.
- ウェッブ, L. K. (著), 小池滋, 石塚裕子 (訳), 『チャールズ・ディケンズ』, 新潟, 西村書店, 1989.

The Sadistic Aspects of Quilp in *The Old Curiosity Shop*

YOSHIDA, Kazuho

In *The Old Curiosity Shop* (1841), Charles Dickens (1812-70) used the same method as he had used in *Oliver Twist* (1838). He gave a strong impression of goodness to readers by showing the contrast between goodness and evil until the end of the story; Nell's innocence, purity, beauty, and goodness, became more striking by the grotesqueness of Quilp, the evil.

Quilp could scarcely be said to be of any particular trade or calling, though his pursuits are diversified and his occupations numerous. He collects the rents of whole colonies of filthy streets and alleys by the water-side, advances money to the seamen and petty officers of merchant vessels, has a share in the ventures of divers mates of East Indiamen, smokes his smuggled cigars under the very nose of the Custom House, and makes appointments on Change with men in glazed hats and round jackets pretty well every day.

Quilp is also a malevolent dwarf who lends money to Nell's grandfather, takes over the Old Curiosity Shop in payment, and then pursues Little Nell and her grandfather when they flee from him. Dickens represented Quilp's appearance: 'His head and face were large enough for the body of a giant. His black eyes were restless, sly, and cunning. What added most to the grotesque expression of his face, was a ghastly smile, which revealed the few discoloured fangs that were yet scattered in his mouth, and gave him the aspect of a panting dog.'

One can safely state that Dickens created the sadistic Quilp by Punch and Richard III. First, the source of Quilp is, as Paul Schlicke supposes, Punch in *Punch and Judy*. Quilp who gives a lot of blows to Kit and Tom Scott with his cudgel and says, 'I'll beat you to a pulp, you dogs' in Chapter 6, reminds readers of the destructive power and the sadistic aspect of Punch who hits the characters with his stick and kills Toby, his child, Judy, the doctor, and the Devil. The feature of Punch can be seen in Quilp in his relationship with his wife. The words

of Quilp to his wife in Chapter 4 ('Oh you precious darling! Oh you de-licious charmer!') are similar to the words of Punch to his wife ('What a pretty creature! Isn't she a beauty?'). Not only the relationship between Quilp and his wife but also the relationship between Quilp and Nell is similar to the relationship between Punch and Judy. Dickens seems to intend to represent a male chauvinist and an obedient woman in the relationship between Quilp and his wife and the relationship between Quilp and Nell. The difference between Judy and Nell is that Judy is killed by Punch while Nell escapes from the menace of Quilp.

Richard III is thought to be the other model of Quilp. As Philip Collins describes Quilp as an exultant bourgeois Richard III, there are some common points. The appearance of Richard III overlaps with the appearance of Quilp. Richard III tells us about his appearance, 'I, that am curtailed this fain proportion, heated of feature by dissembling Nature, Deform'd, unfinish'd sent before my time Into this breathing world scarce half made up—And that so lamely and unfashionable That dogs bark at me, as I halt by them—', while Dickens represented Quilp as 'a dwarf whose head and face are large enough for the body of a giant, whose black eyes are restless, sly, and cunning, and whose finger-nails are crooked, long, and yellow'.

Quilp, the hideous dwarf, terrifies and dominates all who come into contact with him. His power of sexual invasion reminds us of Richard's power of sexual invasion. Ann is urged to make a definite decision by Richard III: 'Take up the sword again, or take up me'. His persistence wears her down, and she gives in. Quilp admires the sexual attraction of Nell and says, 'To be Mrs. Quilp the second, when Mrs. Quilp the first is dead, sweet Nell'. In *The Old Curiosity Shop*, the bird symbolizes Nell who has escaped from Quilp and dies at the ending of the story. Quilp's words, 'Wring its neck', show his sadistic aspect.

Dickens created the sadistic aspects of Quilp, dexterously making use of the sadistic aspects of Punch and Richard III. The sadistic aspects of Quilp contribute to the emphasis on Nell's femininity. What has to be noticed is that Quilp's death presents a contrast to Nell's death. Quilp's shout in the water is equivalent to Richard's shout, 'My kingdom for a horse'. Richard notices that he is trifling before his death, and Quilp's death gives the impression of his pettiness. Nell's death presents a contrast to Quilp's death. The little bird, 'the poor slight thing the pressure of a finger would have crushed', symbolizes Nell. It reminds us of

The Old Curiosity Shop におけるクウィルプのサディスティックな側面

the words of Quilp, 'Wring its neck'. We can say that Dickens represented the condition of Nell who has been released from the sadistic Quilp by the little bird as a symbol.